

津田 仙—基督にある大平民¹⁾—

嶋 田 順 好

1. 津田仙と英語

①. 英語習得の道

津田仙は、時代の流れの本質を深く鋭く見抜く直観と洞察と構想力に満ち、なおかつ改革と刷新のためには悪戯に伝統を墨守するだけではなく、大胆に新しい事を為す強固な勇気と意志を持つ人だった。

そんな彼の面目が発揮された最初の出来事は、言うまでもなく黒船来航の折に江戸湾警備の藩命を受け、そこで黒船の威容に接し、西洋文明の圧倒的な力の前に、彼我の相違を悟ると、俄然、英学、洋学を学ばんと志を与えられ、一筋にその道を突き進んでいったということにあらう。

幕末から明治へと時代の流れが大きく変動していくなか、洋学もまた蘭学から英学へとその重心を大きく転換していった。津田もその大きなうねりのなかにあったわけだが、当時の志ある若者たちが、英語習得のために、途方に暮れるような思いを抱きながらも、血のにじむような努力を注ぎ続けたことは留意しておくべきことであらう。

津田は、すでに佐倉藩の藩校成徳書院で手塚律蔵から蘭学を学んでいたが、1857（安政4）年、20歳の時に、手塚の又新堂の門を叩いた。当初から津田は、英学を学ぼうとしたのであるが、未だその段階では英学を教える人も塾も存在しなかったために、手塚の下で蘭学を学びつつ、時が満ちるのを待っていたのである。その後、1858（安政5）年に津田は、伊藤貫斎の門下となり、そこで後

に東京日々新聞社長となる福地源一郎と親交を深めた。1859（安政6）年6月からは、横浜の福地の家に身を寄せ、福地と共にイギリス人医師から英語を学び、1860（万延元）年には、幕府の通弁御用頭取、外国奉行支配調役を歴任した森山多吉郎のもとに入門した。更に1861（文久元）年にはアメリカ公使館で、その翌年には長野桂次郎について学びを続けている。この時代の津田は、少しでも英学を究めようとして、次々と師を求めて遍歴した²⁾。

又新堂にいた頃の逸話としては、当時の日本における最も優れた英語の使い手であった中濱萬次郎のもとから、小さな英文法の本を借りてきて写しを作成し、更にそれを英蘭対訳辞書を用い、半年もかけて読破したことが伝えられている。つまり、津田は、英語をオランダ語に訳し、さらにそのオランダ語を日本語に訳しながら英文法を学んだのである。当然のことながら、訳してはみても、なかなか意味が理解できず、隔靴搔痒の感を抱くことはしばしばであった。その涙ぐましいまでの英語習得の過程を、彼は思い出として以下のように証言している。

「意味につけた蘭語からして分らない。で又其蘭語の譯を引く、それで讀んでみるけれど、どうしても通じ無い。半日位坐禪をして考へるけれど、何の事だか解ら無い。……譯解すら此の通り、まして發音など云ふものは分らない。先づwhiteと云ふ字があると和蘭流に『ウヒイツテ』と讀むと云ふやうな有様であつた」³⁾。

②．津田仙と内村鑑三の英語習得環境の相違

英語習得という点で、津田仙と内村鑑三を比較すると、その置かれた環境が、天地ほども懸隔があることを知らされる。津田は、1837（天保8）年生まれで、内村は1861（万延2）年生まれであるから、両者の年齢差は、24歳ということになる。しかし、この四半世紀の時の流れは、英語学習環境を一変させた。内村は、12歳で有馬英学校に入学し、13歳で東京外国語学校英語学下等第四級に編入している。彼はそこでスコット・メソッドによる英語教育を受けて力をつけた。17歳で札幌農学校第二期生となったが、当時の札幌農学校は、英語という

点だけをとってみても、日本にそのままアメリカを移設したような別天地であった。実際、内村は、同期生の親友新渡戸稲造や宮部金吾と会話をする時も、手紙をやりとりする時も、英語を用いていた。その結果、新渡戸が証言するように「二十代の頃には、英語の本を読む方が、日本の本を読むより、遙にやさしい」⁴⁾と言えるだけの実力を身につけていたのである。選ばれた秀才たちという限定はあるにしても、内村等が経験した英語学習環境は、今日と比してもはるかに優れたものであったと言えよう。当然のことながら、津田と内村の英語力の差は、両者の欧米文化の受容に関する姿勢の相違を生み出す一つの原因となったことも否定できないであろう⁵⁾。

例えば津田の「キリスト教国」アメリカへの肯定的な評価と信頼は、生涯られることはなかった。最後の訪米となった1893(明治26)年のシカゴ万国博(コロンブス世界博覧会)に審査官として出席した際の「米国談」(1)～(4)⁶⁾でも、審査官としての報告のみならず、ミズーリ州セントルイスの植物園の独創的な運営方法の紹介やミネソタ州の農業を中心とした発展ぶりを報告し、移住の勧めをもって終えている。そこには内村鑑三が『余は如何にして基督信徒となりし乎』で詳述した「キリスト教国」アメリカへの厳しい批判や「武士道の台木に基督教を接いだ物、其物は世界最善の産物」⁷⁾と記すようなキリスト教と日本の伝統思想との関係を積極的に評価する面はほとんど見られない。

津田は禁制下でキリスト教への強い憧れを抱きつつ求道を始め、内村は解禁後に、札幌農学校の寮で先輩の強引な勧誘のもとに求道を始めた。更に、津田の場合は、いずれも公的な職務を帯びての半年に満たない洋行であったが、内村の場合は、離婚問題、健康問題を抱えたまま、金銭的保障のない私的な3年間の長期留学であった。加えて両者の英語力の差もあったに違いない。それらの異なる条件のもとにあったがために、津田と内村の渡航先で出会う人々、経験する出来事の質的相違や解釈の相違も生み出されたと言えよう。当然のことながら、津田の場合は、知識としては人種差別に代表されるアメリカ社会の深刻な問題を知ってはいても、直接触れる機会は少なかったのであろう。どの分野でも草創期の人間には見られがちなことだが、自分が関心を持った対象を、距

離感をもって冷静に省察するよりも、対象に身を入れ、肯定的に見てしまいがちになるが、その点では津田も例外ではない。そこには英語習得の環境という問題一つをとってみても分かるように、彼自身の力ではどうしても乗り越えようのない壁があったことも確かなことである。

しかしまた津田が、弱冠16歳の時に、黒船の偉容に接し、そのときに抱かされた西洋文明への畏怖と憧れの思いを生涯にわたって心に刻み、西洋文明の良き成果を受け入れ、日本の近代化をひたむきに追求し、素晴らしい成果をもたらしたことは正当に評価されなければならない。

その関連で忘れられてはならないことは、津田が、英語を習得しながら、後に学者、啓蒙思想家、政治家となる、多くの力ある同学の士と出会っていることである。又新堂では、木戸孝允、西村茂樹、神田孝平、杉亨二、西周らと同門となった。木戸以外は、皆、後に明六社の社員となった人物である。ほぼ、同時期に、新島襄も短期間だが手塚のもとで学んでいるので、津田の方が、新島より6歳年長ではあったが、両者の間に、この時からすでに交流があった可能性も否定はできない。また、森山の下では、福地源一郎、福沢諭吉、尺振八等と同門となっている。これら人々との出会いが、津田の西洋文明の理解を深め、助けることになったことは言うまでもないことであろう。

③. 津田仙—急劇なる人、大意を理解する人—

津田の英文解釈の姿勢について、学友の一人で後に明治女学校校長となった木村熊二が述べるところは、津田の人物像を浮き彫りにしていて興味深い。

「君ハ性来甚た急劇なる人にて 其英文典を講読するにあたり 一行或は二行を脱して平然として読下す 坐客笑ふも敢て意と為さず 書を読むは其大意を了解せば足れり 何んそ切々字句に拘泥せんや」⁸⁾。

津田の人となりを評した言葉として、木村のこの指摘は正鵠を射ていると言えよう。「急劇なる人」ということを言い換えれば、津田にとって良いと判断されたことであれば、事をなすにあたって間をおかず、猪突猛進となって全力をあげて取り組むということであろう。しかし、それが単に熱しやすく冷めやす

いということであれば、一時の気まぐれにすぎず、軽挙妄動の人ということにしかならない。しかし、津田は、「急劇なる人」のみならず、実には的確に「大意を了解」する人でもあった。つまり、些末なことにこだわらず、一見、大雑把のようであるが、肝心要の急所や本質をしっかりと把握することができる希有の資質を持っていた。しかも、自分が重要なことと認識して、事を起こしたら、軽挙妄動とは正反対に、そのことをあだや疎かにせず、途中で断念することもなく、責任的に引き受け、しっかりとやり抜く持続性と誠実さを持ちあわせていたのである。

2. 西洋文明の洗礼

①. 津田と丁髷

そんな津田の生き様を象徴する出来事が、1867（慶応3）年、勘定吟味役・小野友五郎を代表とする訪米使節団に、通弁御用出役として、福沢諭吉、尺振八らと共に加わり、初めて海外の地に足を踏み入れたサンフランシスコで起こっている。彼は、同地に滞在している間に、髪結いがいないので煩わしいという理由から、丁髷を切って、留守宅に送りつけてしまったのだ。すでに洋式軍制の導入が始まって以来、丁髷を結わずに散髪する風潮が広まりつつあり、1871（明治4）年8月9日に太政官布告として「散髪脱刀令」が出されたとはいえ、津田が、この時点でこの挙に出たことは、まさにその後の彼の人生を象徴する出来事であった⁹⁾。

使徒パウロは、ローマの信徒への手紙第6章4節で、洗礼の意義について「わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです」と語っている。津田が、妻初子と共にジュリアス・ソーパーから洗礼を受けるのは、1875（明治8）年1月のことであるから、断髪が出来事より8年後のことである。しかし、彼がどれだけ自覚していたかは分からないが、まさに丁髷を切ったこの出来事は、西洋文明の「洗礼」を受けた津田が、古き自分に死に、新しき自分に生まれ変わる

象徴的な行為であったと言えよう。

② . 四民平等尊卑の別なく—南北戦争との関わりにおいて—

それでは津田に新しく生まれ変わることを促した西洋文明の洗礼とは、具体的には、一体何であったのだろうか。この最初の外国への旅の出発から帰国までの全行程は、ほぼ半年弱であったが、実質的には4ヶ月に満たない米国滞在であった。そこで津田が見いだしたものを、彼自身の言葉で明らかにすれば、「彼国の風俗人情を見聞して、四民平等尊卑の別なく、殊に農家の富裕にして、農業は国家の幸福を来すべき事業たるを知り、而して我が国農家の地位を高め、農業の発達を企図せんものと感慨実に少なからざりき」¹⁰⁾ということになる。

ここで「四民平等尊卑の別なく」と「農業は国家の幸福を来すべき事業」と津田が指摘することによって彼が言わんとしたことは、士農工商という封建的身分制度のない社会が現に存在していることへの驚きである。すなわち民主的な制度のもとに、市民権が保障され、法の下での平等が貫かれ、職業や性による差別のない社会に対し、津田は何よりも感動を覚えたということである。もちろん、今日の視点からみれば、当時の米国社会にも、黒人差別、男女差別等、様々な問題があったと言えるが、幕末の日本に比すれば、津田の目には、職業の貴賤がなく、人々の基本的人権が保障され、自由闊達に生き得る社会が、そこには現前していると見えたのである¹¹⁾。

ここで忘れてはならないことは、津田が米国に足を踏み入れた1867年という年は、エイブラハム・リンカーンが凶弾に倒れ、1861年から65年にかけて足かけ5年にわたって展開された南北戦争が終結した翌々年にあたるという事実である。南北戦争の戦死者は、約62万人にものぼり、これは第二次世界大戦で米国が出した犠牲者約41万人をはるかに凌ぐ数字となっている。つまり、南北戦争は、内戦とはいえ、これまでアメリカ合衆国が戦ってきた、どの戦争よりも多くの犠牲者を出した悲惨な総力戦だったのである。したがって津田が米国本土に足を踏み入れた時は、その戦争の傷跡が、未だ色濃く残っていた時期であった。

しかも、小野使節団の目的は、幕府が1862（文久2）年から3年にかけてロバート・プルーイン米国公使と軍艦3隻を購入する契約を交わし、代金を支払っていたにもかかわらず、契約が履行されず、「富士山丸」一隻しか届いていないトラブルを解決することにあった。具体的には「プルーイン元公使への発注のうち、『富士山丸』以外の分の取り消し確認と精算、米国既製軍艦の別途購入、海軍方・陸軍方・勘定方の依頼による兵器・書籍類の購入などであった」¹²⁾。

当然、武器購入の交渉の際には、常に南北戦争のことが話題の中に含まれたことであろう。具体的には南北戦争中の高名な戦闘、例えば、装鉄艦同士の歴史上最初的大海戦として知られるハンプトンローズの海戦や、最大の激戦地となったゲティスバーグの戦いがどのように戦われ、改良された軍艦や様々な兵器が如何に攻撃性能を増し、また扱い方が容易になったか等ということが話し合われたに違いない。なによりも使節団としては、下手なものを掴まされないように戦争で用いられた余剰武器の評価に細心の注意を払う必要があった。幕府きってのテクノクラートであった小野は、1861（万延元年）に咸臨丸の測量方兼運行方（航海長）として初めて米国に赴いているが、その折り、嚮導役として同乗し友情を交わすようになったジョン・M・ブルック（咸臨丸乗船時は海尉、その後南部海軍技術士官を経て、この当時はヴァージニア軍事大学教授）から最新の兵器情報を入手し、おさおさ怠りないよう準備していた。それ故、使節団は、見事に期待通りの軍艦や武器を購入することができたのである¹³⁾。

一行は、3月19日にニューヨークに到着し、23日には米国政府が用意した特別列車でニューヨークからワシントンに移動、5月3日までの約40日間を、主にワシントンで過ごした。3月28日には国務長官ウィリアム・H・スワードを公式訪問、4月1日にはホワイト・ハウスで、アンドリュー・ジョンソン大統領にも謁見している。一行が見学した主要な施設は、海軍兵学校、海軍工廠、陸軍兵器廠、特許庁、政府印刷局、植物園、小学校、盲啞学校、ジョージ・タウン大学、スミソニアン博物館などで、帰途、ニューヨークへ赴く途中では、炭鉱見学もしている。そして念願通りの装鉄艦を手に入れ、大量の武器弾薬、10トンもの書籍を購入して帰国の途についたのである¹⁴⁾。

津田にとって幸いだったことは、小野が、本を購入するにあたり「米国海軍省の軍艦引き渡し担当者であるシルトンに選書を依頼して、実務担当者として津田仙弥と神野信之丞」¹⁵⁾を指名してくれたことであろう。その結果、津田は曲がりなりにも、軍事技術を筆頭に、主に科学技術関係の最先端の情報がつまった書物を渉猟することができたのである。医学・薬学にも関心のあった彼は、個人としてヨセフ・ウェーゼスの薬学書とヘンリー・ハーツホーンの医学書を持ち帰っている。いずれの書も後に桑田衡平の手によって訳され、『袖珍薬説』『内科摘要』と題して出版され、ベストセラーになった¹⁶⁾。

津田は、祖国の近代化のために貢献したいとの篤き志を堅持しつつ、使節団に加わっていた。それだけに、米国滞在を千載一遇の機会とし、祖国の発展にとって有用な西洋文明の精華を、少しでも学びとりたいという獵犬のような嗅覚を働かせて情報収集にあたっていたに違いない。彼にとってのこの旅は、見るもの、聞くもの総てが珍しく、驚きに満ちた発見と、めくるめく興奮に満ちた感動の連続であったことであろう。なにしろ彼は翻訳方、書記官として、ことごとに記録をとり続けたのだから、日々の出会いや出来事を誰よりもよく脳裏にたたき込むことができたに違いない。

しかし、その津田がこの旅のなかで、最も深く心に刻みつけたことは、優秀な軍人を生み出す兵学校のこともなければ、強力な軍艦や最新式の大砲やライフルを生み出す軍事技術でもなかった。また、鉄路を驀進する蒸気機関車に代表される産業技術、先端的な薬学や医学の成果でもなかった。更には合理的に整えられた諸制度や都市のインフラストラクチャーでもない。そして大統領や国務長官に出会ったことでもなかった。彼の心を捉えて放さなかったことは、実に「四民平等尊卑の別なく」人々が生活し、日本では侮られ蔑まれている農民が、「国家の幸福を来すべき事業」の担い手として豊かに誇りをもって農業に従事している姿だったのである。

津田は、武芸百般に優れた武士であり、16歳の時に黒船の偉容に接して西洋砲術を学ばんと志を与えられた。したがって、彼にとっては軍人としての道を歩むことは、ごく自然な選択となりえたであろう。また津田は、小さい頃か

ら探求心に富んでいた理工系人間であったから、小野友五郎のように数学者・技術者としての道を歩む選択肢もあり得たであろう¹⁷⁾。さらに小さい頃に失明の危機にさらされるという病の苦しみを知り、外国方時代には杉田廉卿とも交流のあった津田には、医師となる道もあり得たであろう。しかし、津田はこの米国への旅で、不思議にも、それまでの彼の生活世界、彼の思考のパラダイムからは最も遠く隔たっていた「四民平等尊卑の別なく」人々が暮らす社会の素晴らしさ、農民が豊かに誇りをもって暮らせる社会の素晴らしさに魅了されてしまったのである。一体、津田に何が起こったのだろうか¹⁸⁾。

当時の米国では、アフリカ系米国人の市民権、法の適正な過程、法の下の平等を保障する合衆国憲法修正第14条（1868年成立）が、前年の6月13日に議会に提出され、各州で順次批准されつつあった。この修正第14条は、今日では、奴隷制度の禁止を定めた修正第13条（1865年成立）と、人種に基づく参政権付与の禁止を定めた修正第15条（1870年成立）と共に、南北戦争後に成立したアフリカ系米国人の権利を守るための「レコンストラクション修正条項群」として知られている¹⁹⁾。

日本が、幕末から明治へという大きな転換期を迎えていた時、アメリカもまた、国を二分する戦争の惨禍を経験する激動の時代を過ごしていたのである。言うまでもなく、南北戦争は、連邦の分裂を防ぎ、南部の奴隷解放のために戦われた戦争であった。そのアメリカ合衆国の大義と理想のために戦われた戦争、そしてその大義と理想に殉じたリンカーンの存在は、津田の思想、信条に、深い影響を与えずにはおかなかったのではなかろうか。残念ながら津田が、南北戦争やリンカーンに関して直接言及した文書は残っていない。しかし、彼が、幕府に必要な武器調達をするという使命を達成するため、ひたすら軍事面からのみ南北戦争を理解しただけで、その戦争が合衆国の建国の理念を守り、奴隷を解放するための戦いであった事実を知らないままですごしたということは考えられないことである。むしろ津田は、書記官として記録をまとめながら、この戦争が「この国のかたち」のために戦われたという事実を知らされ、深い感銘に捉えられたことであろう。それと共に、日本の封建的身分制度のもとに喘

ぐ、女性や農民たちのことにも思いを馳せたのではなからうか。したがって、米国滞在の思い出として、彼が「四民平等尊卑の別なく」ということと、米国農業の素晴らしさを讃える思いを吐露した背後には、たとえそれが短い言葉ではあったにしても、米国における津田の「回心」とも言える決定的な経験が、覆われたかたちで含意されていると見なすことができるのではなからうか。

③. 四民平等尊卑の別なく—女性の社会進出との関わりにおいて²⁰⁾—

ところで、津田が訪問した頃の米国は、すでに女性が男性と同様に教育を受ける機会を与えられ、様々な領域で積極的に奉仕を担うようになりつつある時であった。したがって、「市民平等尊卑の別なく」と津田が記す時、女性が生き生きと社会進出している姿に驚き、感銘を与えられたことをも含んでいることを忘れてはならない²¹⁾。もちろん、米国だからと言って、最初からそのような女性の地位が確立されていたわけではない。それはきわめて19世紀的な現象であった。

18世紀の頃の米国では未だなお多くの女性は、農村社会で、伝統的な自給自足的と言える生活様式をとっていた。家庭は、生活の場であると同時に、生産現場でもあった。妻は、炊事、洗濯、育児をこなしながら、夫を助けて家内労働的な生産活動にも積極的に参与しなければならなかった。しかし、産業資本主義の発達と共に市場経済が活性化し、それまで女性が家庭で作りに出していた様々な日用品、とりわけ繊維製品が、大量に工場で生産されるようになると、女性のライフスタイルも大きな変化を遂げることになる。もちろん、あくまでも都市部という限定つきではあるが、夫は賃金労働者として工場や事務所で働き、家庭の主婦は、生産者としての地位から解放され、代わりに余暇を得ようになる。

これだけを取り上げると、近代化は男女の職務を空間的、質的に分離し、女性を生産活動から引き離し、その結果、男性への経済的依存度を増大させ、その立場を劣勢な状態に追い込んだかのように見えてくる。しかし、そのことが19世紀のアメリカでは、即座に女性の立場の弱体化にはつながらなかったのだ

ある。むしろ、女性は、家庭を基本とする「女性の領域」を確保することで、その領域の重要度を極大化し、礼賛し、女性の社会的発言力・影響力を増していった。余暇を得た女性が、家庭以外に最も可能性のある「女性の領域」として見出したのが、教会における海外宣教活動と共に、様々な慈善的、道徳的な社会活動への進出であった。つまり、19世紀のアメリカ女性は、家庭という私的空間から、教会を通じて社会という公的空間にまで積極的に活動範囲を広げて行ったのである。

更に南北戦争は、共和国を守るという理念のもとに、女性によるキリスト教的博愛精神に基づく無償の公的活動が大規模化する絶好の機会となった。事実、南北戦争以後の女性の社会的活動は、それまでのローカルなものから、一挙に全国規模のものへと発展していったのである。その最も顕著な代表的例が、婦人キリスト教禁酒同盟であり、1860年代～70年代にかけて各教派に相次いで誕生した婦人伝道局の働きであった。

当然のことながら、女性の活動領域の拡大は、高等教育への要求を生み出し、マウントホリヨーク（1837年）に次ぐ女子大学が、ヴァッサー（1865年）、ウェルズリ（1875年）、スミス（1875年）、プリンマー（1884年）と創立されていったのである。

この時代に専門化した女性サービスの典型として挙げられるのは、看護婦の仕事であった。ここでも覚えておきたいことは、梅子とともに留学し、日本人女性としてはじめて大学教育を受けた山川（大山）捨松が、1882年6月にヴァッサー大学を優秀な成績で卒業した後に、ニューヘイヴン病院、コネティカット看護婦養成学校に二ヶ月間、学んでいるということである。それはまさにその時代の空気を反映しているものと言えよう。

④. 女子教育への支援

いずれにしても津田の最初の米国滞在で、彼は、女性たちが、生き生きと自由闊達に、自信にあふれて社会貢献する姿を目の当たりにしたのであろう。そのことは、それまでの津田の女性観を一変させ、女子教育への理解者、支援者

としての津田を誕生させることになったのである。

米国に赴く前の津田は、そもそも長女琴子の後に生まれた子が、女の子（次女梅子）であることが分かったと落胆し、命名に際し「何とでも勝手につけろ。そこらに咲いているうめでもよいではないか」²²⁾と不機嫌にどなったということである。しかし、帰国後の津田は、未だこの段階では賢母賢子思想のなかに留まっていたとは言え、それまでとはうってかわり、娘の教育に心を配るようになる²³⁾。だからこそ、黒田清隆の発案によって成った、最初の米国女子留学生派遣に、長女琴子が渋ったこともあってだが、まだ満6歳でしかない年端もいかなない梅子を参加させることにしたのである。このことにおいても「急劇なる人」にして「大意を了解する」人としての津田の本領が発揮されたと言ってよからう。

その後の津田の女子教育への関わりを見てみよう。ドーラ・E・スクーンメーカー宣教師が、1874（明治7）年11月16日に、女子小学校を発足させる時も、津田はジュリアス・ソーパー宣教師の依頼を受け、二つ返事で校主となり、麻布にあった政商岡田平蔵邸の一部を自ら借り受け、生徒募集も一手に引き受けている。居留地以外では、宣教師は土地・建物を借り受けることができなかったからである。ところが、二ヶ月後に岡田が急死し、その屋敷が売却されることになったため、急遽、津田は自宅の一部を教室として提供している。その後も薬師堂、大聖院（この段階で津田により校名を「救世学校」と変更）、太子堂と校舎は転々とし、ついに築地居留地内にジュリアス・ソーパー宣教師が土地を買い入れ、1877（明治10）年1月に「海岸女学校」として発足するまで、津田はこの学校のために奔走し続けたと言ってよい。

その後、彼は、メソジスト監督教会のカロライン・W・ヴァン・ペテン宣教師を助け、1884（明治17）年に横浜山手に開校された女性伝道師を養成するための聖經女学校の命名者となった。また、1887（明治16）年10月には、フレンド派のジョセフ・コサンド宣教師夫妻を助け、自宅屋敷内に自らが命名した普連土学園を創立させることに協力している。更に、津田は、妻初子と共にメソジスト監督教会のミス・ブラックストック宣教師を助け、1894（明治23）年9月、

麻布にかなり大きな家を借りて、職業教育を受ける「女子手芸学校」の創立に協力した。

文字通り、「困った時の津田頼み」という言葉が、そのまま当てはまるほどに、自らの時間、労力、資産を惜しみなく提供しつつ、彼は献身的に女子教育の発展のために貢献し続けたのである。もちろん、彼の教育に対するこのような支援は、女子教育のみならず、ジュリアス・ソーパーが設立した「耕教学舎」や、「訓盲院」（今日の筑波大学付属視覚特別支援学校）の創立となっても実を結んでいる。

3. 事業家としての津田仙

①. できる限り稼ぎなさい、できる限り蓄えなさい。

津田が思い描いていたことは、農業で日本各地の特産品、輸出品を育成し、地方経済を活性化し、ひいては貿易収支の拡大を目指し、国を富ませ近代化を果たそうとすることであった²⁴。政府が富岡製糸工場、八幡製鉄所などの国営工場を建設し、工業によって富国強兵を達成しようとしたのとは異なり、彼は農業、教育（とりわけ女子教育）、キリスト教によって豊かで平和な日本を築こうとしたのである。

津田は、この壮大なヴィジョンを絵空事にしたまま放置はしなかった。米国から帰った彼が、幕府の崩壊と共に、最初に手をつけたことは、自ら帰農して農民となることであった。「東京に些少の地所を購入して、農事試験に従事したり、当時予の親戚知友等は予を諫めて、卑賤の農業に従事せんよりは、朝廷に仕官すべきを以てしたるが、予は断乎として之を斥けた」²⁵のである。もちろん、農業だけでは食べられないので、新装なった築地ホテルの理事にも就任している。

その後、1873（明治6）年1月、ウィーン万国博に「農具及庭園植物主任兼審査官 三級事務官心得 事務局御雇」として派遣されると、オランダ人農学者、ダニエル・ホーイブレンクから、気筒法（筒を用いて大気を土中に送り、地質を肥やす法）、偃曲法（樹枝を伏せ曲げて本幹の勢力を増大させる法）、媒助

法（人工授粉法）を学び、帰国後の1874（明治7）年5月に『農業三事』として出版し、類書がなかったために、大ベストセラーとなっている。

1875（明治8）年9月には、学農社を興し、自らの資を投じて農学校を創立し、翌年1月には『農業雑誌』を発刊して、日本における農業の刷新と人材育成のために、最も必要なことを始めたのである。その他にも、彼は勝沼のワイン製造や、アメリカのニュー・イングランドのピューリタン共同体をモデルとした北海道における赤心社による開拓農場の育成にも協力を惜しまなかった。と同時に、政府の補助金や指導に依存する大日本農会に対しては距離を置き、農民達が自分たちで話し合い、協力し、研究して自主自立の道を歩むことを熱心に勧めたのである。したがって、津田が、「雑誌を刊行し、農民に科学的な農業技術を注入しようとする意図は、『唯利を是れ図り』といった実利的立場の主張以上に、自主自由の独立自営農民の育成を目指すものであり、……個々の農民をして、営利追求的な経済人として自立せしめよう」²⁶⁾と願ってのことなのである。

このような津田の歩みを振り返ると、彼が武士であったにもかかわらず、事業を興し、経営し、運営し、利益を得ることに全く禁欲的でなかったことに気づかされる。新渡戸稲造は『武士道』のなかで、武士は「金銭そのものを——金もうけ、金をためる術——いやしむ。金は彼にとって不浄な悪銭であった」²⁷⁾と記している。新渡戸の指摘を待つまでもなく、明治期に特権を喪失した士族たちが、経済観念も十分に持たないまま慣れない商売に手を出し、失敗することが多かったために、「士族の商法」という慣用表現が生み出されたことは、周知の事実である。しかしながら、そのような紋切り型の武士像は、およそ津田には当てはまらない。

彼の父小島善右衛門良親は、佐倉藩の百石取りの中級武士であったが、「破損奉行、勘定頭、小納戸元方、財曹分課司庫局権大属など」を歴任した人で、長兄も「勘定吟味役、学問所執事」を務め、藩校の温古堂で「算学所頭取手伝い」として教師もしていた²⁸⁾。つまり、父も兄も、佐倉藩の財務会計の中樞で働く、数字に明るい、経済観念の発達した人たちだったのである。その素質は、そのまま津田にも継承されていたと言えよう。

津田が、農業で利益を得た最初の出来事は、1972（明治5）年、築地ホテルに勤務していた時に新鮮な西洋野菜が入手できずに途方にくれているホテルの窮状を知り、手を差し伸べた時のことである。彼は、アスパラガス栽培に手を染め、「50円を資本として、50坪の地に栽培を試み……これを外人に売って三百円余の利潤を得たり。其の他甘藍等の西洋野菜よりも少なからざる利益を得たり」²⁹⁾ということであった。まさに濡れ手で粟の状態にあったと言えよう。彼は、その利益をもって麻布本村町に1700坪ほどの土地を長男名義で購入している。

津田は、基本的に需要曲線と供給曲線の均衡点で価格が決まり、供給量が少なければ、均衡価格が上昇することを十分に知り尽くしていたのであろう。その意味で利益を得る商才に長けていたとすることができる。実際、彼は学農社の経営においても、非凡な才能を示した。まずもって、稲や麦の人工受粉のために用いる「津田縄」の販売に成功している。この「津田縄」に関しては、その効能に関し、大きな物議を醸し、最終的には費用対効果において十分な結果を得られないとの判定が下ってしまったが、事業的には津田に多大な利益をもたらしたと言えよう。

また、『農業雑誌』で、彼は様々な西洋の野菜や果物の育成、栽培方法を紹介したばかりでなく、種苗や農具の通信販売を積極的に展開した。『農業雑誌』の1876（明治9）年「4月第8号に、郵便による申込を受けて商品を送付する通信販売の方法が、『稟告』として明示されている」。津田こそは、日本における通信販売の創始者であった³⁰⁾。更に何よりも驚くべきことは、1876（明治9）年1月に創刊された『農業雑誌』が、1920（大正9）年7月・1221号に至るまで、つまり津田が召された後も発刊され続けたことである。発行部数に関しても、1893（明治26）年から1899（明治32）年にかけては、平均3000部の売り上げを記録している³¹⁾。「明治期の雑誌は、『三号雑誌』との言葉があるほど、その発刊・廃刊は頻繁である中で、『農業雑誌』の継続性・安定性は評価されていいだろう」³²⁾（表Iを参照）。

表 I 主な農業雑誌の発行期間

雑 誌 名	発 行 者	発 刊	廃 刊
農業雑誌	学農社	明治9 (1876) 年	大正9 (1920) 年
農事新報	有隣堂	明治21 (1888) 年	明治32 (1899) 年
産業時論	産業時論社	明治23 (1890) 年	明治24 (1891) 年
日本農業新誌	博文館	明治25 (1892) 年	明治27 (1894) 年
	農業社	明治28 (1895) 年	明治30 (1897) 年
	東京農書館	明治31 (1898) 年	明治32 (1899) 年
農業世界	農業社	明治32 (1899) 年	明治34 (1901) 年
興農雑誌	東京興農園	明治27 (1894) 年	明治41 (1908) 年
農事雑報	農事雑報社	明治31 (1898) 年	明治42 (1909) 年
農業世界	博文館	明治39 (1906) 年	昭和43 (1968) 年

『産業時論』、『日本農業新誌』、『農業世界』には継続関係がある。西暦表記は、筆者の挿入。
 福澤徹三「農業雑誌の受容と実践」『一橋論叢』134 (4)、2005年、748頁より。

『農業雑誌』がこれだけの長寿雑誌となった背景には、津田が、優れた編集者と共に、的確に読者のニーズを受け止めて誌面に工夫をこらしたからである。その編集スタイルは、明治20年代後半にはほぼ確立されたが、「読者参加型のページ」（寄書・問答・種子分与報告等）が、「全体の約四割」を占めることが大きな特徴である³³⁾。何事もコロブスの卵で、読者参加型の編集方針ということは、今日では至極当然のことで、特に目新しさを感じないことかもしれないが、ここにも津田の独創が生かされている。

更に農学校経営の創意工夫として注目すべきことは、津田が、年2円の会費で、農事に関わる質問をすることができる通信員制度を設けていることである³⁴⁾。「学農社学校規則」の前文には、その数が「六百余名」に達していることが告げられている。この制度では、未だ具体的な農学に関わるカリキュラムを教授するところまでには至っていないが、今日の通信教育制度の嚆矢ともいえ

るシステムと言えよう。この制度は、『農業雑誌』の読者が、より一層踏み込んだ農事上の疑問を解決するための方途として設けられたものであるが、それはまた、農学校の経営基盤をより確かなものとする助けとなったであろう。しかも通信員制度を設けることによって、農学校は、各地で意欲的に特産品開発や農業振興の先兵役を担う篤農家たちと強固なネットワークで結ばれることになった。つまり、農学校は、気候、風土も異なる全国各地に、実質的には委託実験農場を多数抱えるのと同様の効果を得ることになったのである。このネットワークが農学校にもたらす農事上の知的資産の集積は、他の追従を許さない良質で膨大なものがあったと言えよう。

②. できる限り与えなさい

津田は、学農社の事業を通して手にした多くの収益を、どのように用いたのであろうか。彼が、その収益を、ただ自分の利得のみを目的とし、投機的に運用するようなことをした形跡は見いだせない。

津田を深く敬愛した山鹿旗之進が「併し先生は失礼ながらどうしても金持ちにはならぬお方である。否な、金持になれない性質である。先生にして若しその志富貴に在つたなら、これまで幾らも其機会があつたのである。縦しまた先生を陶朱やクレソスにしたところが、それはほんの一時の事で、あるところのものは、之を盡く他のために消費せでは満足せられないのである」³⁵⁾と評したことは、実に的確に津田の金銭に関わる姿勢を示した人物評と言える。

ジョン・ウェスレーが「金銭の使い方」³⁶⁾という説教のなかで明瞭に説いた「できる限り稼ぎなさい、できる限り蓄えなさい、できる限り与えなさい」という教えを、ソーパーやマクレイを通じて津田自身が知らされていたか否かを確認することはできないが、彼こそは、生涯を貫いて、その教えを忠実に実践し続けたキリスト者の一人と言えよう。

もちろん、客観的にその事実を論証することはできないが、状況証拠から帰納的に推察する限り、津田は、彼が創設に関わった様々な学校のために、各地の農業振興のために、福音宣教のために、禁酒・娼妓運動のために、足尾鉾毒

事件のために、そして何よりも自らが創立した農学校の経営のために惜しみなく与え、注ぎ続けたと言える。しかも、彼は、「困った時の津田頼み」をされると、断ることができなかった。

その典型的な例が、商法講習所を1878（明治11）年5月に解雇されたウィリアム・コグスウェル・ホイットニーの窮状を救うために、同年11月に学農社農学校の分校として「銀座簿記夜学校」を津田が創設し、月給80円でホイットニーを雇い入れたという事実³⁷⁾に示されている。この給与額は、政府のお雇い外国人の給与と比べると低いものだが、1877（明治10）年12月に改正された東京府の小学校教諭俸給表と比較してみると、最も高給の一等訓導でも、月俸は、26～30円³⁸⁾となっていることから、決してホイットニーに対して礼を失した給与ではないことがわかる。学校創立も含め、これだけのことを津田は、すべて自分一人でまかない、電光石火の早業で成し遂げたのである。

ところで、学農社農学校は、1875（明治8）年9月1日に発足したが、新築校舎が落成したのは、翌年7月のことであった。高崎宗司氏は、津田が勝海舟から同年9月23日に3千両を借金して、校舎新築の資金に充当したと推測している³⁹⁾。となると、すでに農学校発足二年目の段階で、津田は手元資金の大部分を費やしてしまい、まとまった余剰資金を残してはいなかったと見なすことができよう。

人文科学や社会科学の学校であれば、それほど運営経費は多額にはならないだろうが、農学校の場合には、種子、肥料、飼料、化学薬品、農機具の購入や実験農場の維持運営のために多額の経費を必要とする。興味深いことに在籍生徒数が最も多かった1881（明治14）年11月に、「学農社履歴並目的」が起草され、その中で津田個人の支弁では、農学校の運営に限界があることが訴えられている。その文書には、農学校の財政問題を解決するために、寄付金によって基金を築き、その運用益を経営にあてることや、出版・開墾事業などの企業活動を充実させ、その利益を学校経営に振り分けるなどの提言がなされている⁴⁰⁾。つまり、農学校の運営が、一番順調に進捗しているときでさえも、学校経営は、赤字体質であったということであろう。

表Ⅱ.学農社農学校の教員、生徒数の変遷

年 次	教員数	生徒数
1875（明治8）年	1	12
1876（明治9）年	7	35
1877（明治10）年	4	53
1878（明治11）年	8	70
1879（明治12）年	10	145
1880（明治13）年	9	167
1881（明治14）年	10	175
1882（明治15）年	8	80
1883（明治16）年	8	43
1884（明治17）年	2	25
合 計	67	855
平 均	6.7	85.5

内田糺「第二章津田仙と学農社」

細谷俊夫編著『人物を中心とした産業教育史』、51頁。

「学農社学校規則」によれば、入社金は2円であるが、在籍生徒の毎月の負担は、月謝・1円、雑費・25銭、月俸⁴¹⁾・2円25銭、合計3円50銭となっている。当時の農家の所得水準からして相当高額で、地主豪農クラスの子弟か、自治体や篤志家の奨学金を得た者でなければ、到底、入学は困難であった。一方、学校経営という視点からすれば、表Ⅱにあるような生徒数であったから、勝海舟からの借入金の返済、教員給与、更には職員給与、様々な運営経費を学生納付金だけで賄うことは至難の業であり、結果的には、津田個人が、経常的に多額の赤字を補填し続けなければならなかったと思われる。

しかも、西南戦争の戦費調達で生じたインフレを抑制するため、1881（明治14年）末から大蔵卿松方正義がとった極端なデフレ誘導の経済政策は、バブル崩壊を招き、農産物価格の急激な下落と共に、一挙に農村の窮乏化を惹起させ、学農社並びに農学校の経営を直撃した。つまり、農学校の在籍生徒数が急激に

減少し、『農業雑誌』の発行や、種苗・農機具の販売という学農社の利益を生み出す事業をも弱体化させ、農学校の経営を行き詰らせたのである。事実、デフレが深刻化した1984（明治17）年9月から翌年2月までの半年間だけではあったが、学農社は『農業雑誌』さえも、休刊せざるを得ない状況にまで追い込まれたのである。

津田は、生来の経営的センスを生かし、学農社の事業で多額の収入を得ることができたが、その資金を用いることにおいて、綿密な資金計画を慎重に練るような資質には欠けていた。こと農学校の経営ということでは、松方デフレという深刻な経済的要因があったとしても、生来の「急劇な性格」と「大意を了解せば足れり」という姿勢が、災いしたと言えるであろう。そこには、自らの壮大なヴィジョンを少しでも早く実現したいとの「焦り」のようなものも働いていたに違いない。既に見たとおり、津田は、ホイットニーを学農社に雇い入れ、銀座簿記夜学校を創設している。にもかかわらず、彼は、ホイットニーのもとで複式簿記の基本を学んだ娘婿の上野栄三郎や三輪振次郎らの力を借り、農学校経営に生かすことはせず、およそ会計学的な常識とは無縁な手法を取り続け、松方デフレのなかで農学校を存続させることに挫折してしまった。まことに残念なことと言わざるを得ない。

しかし、それら一切のことを含め、津田が、「受けるよりは与える方が幸いである」（使徒言行録20章35節）との御言葉に従い、自らの賜物を存分に生かしつつ、「できる限り稼ぎなさい、できる限り蓄えなさい、できる限り与えなさい」との歩みを、生涯を通して貫いたことは、高く評価されてしかるべきであろう。津田が召された後の「残された遺産に、自宅と三千坪の土地、そして鎌倉の別荘があったが、『多大な借財もあった』」⁴²⁾ということであった。

4. 津田仙—基督にある大平民—

本多庸一は、津田の葬儀説教を「無窮の向上」と題して語っているが、その終わりのところで津田を評して、次のように述べている。

「新聞には貴族院議員津田仙君薨去とございました。之は無論誤聞でございま

したが本統に然思ふ筈である。津田先生の如き世間に多大の功労ある人は貴族院議員になるべき人であります。然し、津田先生は之を残念に思はない、津田君は大平民であります。平民中の多数の農民に同情を有て居る平民である、丸裸となつても立派な国民である。罪ある人、不道德の人に同情を持つて居る平民——基督教的平民——天下万世の為に身を犠牲に供したる基督にある大平民である」⁴³⁾。

この本多の津田理解も深い。まさに彼は断然、自らの人生を平民として生きることを選び取った人間だからだ。実際、津田の生涯を振り返るとき、彼自らが、「四民平等尊卑の別なく」、一筋にその生涯を歩み続けたことがよく理解できる。明治時代の功成り名を遂げた人の伝記を繙くとすぐに気づかされることは、大抵は冒頭のところに大礼服に身を包んだ肖像写真が掲げられているということだ。明治4（1871）年に「服制ヲ改ムルノ勅語」が出され、翌年には太政官布告として文官大礼服が定められているのだから、爵位勲等を得た人の基本的な身だしなみということなのだろう。しかし、津田の場合には、正装と言っても紋付袴姿の写真しかない。津田は佐倉藩士ではあったが、明治になって士族籍を放棄した人間であり、きわめて自覚的に爵位勲等とは無縁に平民として生きたからである。

津田は、1875（明治8）年9月、学農社農学校を創設した。この学校の一つの特徴であるが、授業の中では実験が重んじられた。その時間数は、毎週9時間に及び、それは札幌農学校や農事修学場（後の駒場農学校）よりも多い。規則によれば、実験を行う組の責任者を実験伍長と呼んでいるので、実験は多分、5人前後のグループで行われていたのであろう。興味深いことに実験伍長は、成績や教授の指名によらず、各組ごとの互選によって決められることになっていた。いかにも津田らしく、学生たちの自主性を重んじ、農学校を民主的に運営しようとした姿勢がはっきりと読みとれる。

また1879（明治12）年8月15日発行の『農業雑誌』第87号には、学農社の建物の前庭に、68名の教師と生徒が集合したスケッチが掲げられている。前列中央に洋装姿の津田と思われる人物が描かれているが、他は、全員普段着の和服姿

で、誰が教師で生徒であるかが判然としない。「官立学校の記念撮影のように教師が前列に威儀を正しそのうしろに制服姿の生徒が並ぶというようないかめしい雰囲気はない」⁴⁴⁾ところが、当時の農学校の自由闊達な雰囲気を生き生きと物語っていると言えよう。

更に1908（明治41）年4月24日、津田は、品川から鎌倉へ帰る横須賀線三等車の車中で脳出血に襲われ、誰にも気づかれぬまま70歳の地上の生涯を終えた。それまで津田は、新築祝いも兼ねて娘婿上野英三郎の家に数日間滞在していたのだが、帰宅当日の朝、体調が悪く医師に往診してもらっている。医師から「鎌倉に帰りても大丈夫なり」との診断を得たため、彼は帰路についたのだが、乗車して間もなく絶命したらしい。懐中には、一等車に乗れるだけの現金を持っていたにもかかわらず、津田は三等車に乗車していた。体調がすぐれない高齢者なのだし、経済的にも余裕があるのだから、誰が考えても一等車で帰路につくのが当然と思われるのだが、彼はそうすることを自らに許すことを肯んじ得なかった。ひたむきに、一筋に「四民平等尊卑の別なく」、一人の平民として生ききろうと願っていたからである。

隅谷三喜男は、草創期日本人キリスト者の倫理主義に関して次のように記している。

「市民社会においては市民一人々々が人格として尊重されねばならず、権利と義務の主体として確立されなければならない。女は男の奴隷であり、平民は士族の奴隷であり、士族は君主の奴隷であるような社会を支える身分制の主従関係の倫理を破壊し、男も女も士族も平民もない社会を、すなわち、市民社会を打ち建てるためには、これを根源的に支える倫理、市民倫理がなければならない。キリスト教徒となった人人はそれを、神の前に四民の平等を教えるキリスト教の中に発見したのである」⁴⁵⁾。

まさに津田は、そのような基督にある大平民の一人であった⁴⁶⁾。

- 1) 『キリスト教と文化 (24)』(2009年3月)に「津田仙の信仰と生涯」を寄稿したが、津田の問題意識が芽生えた背景を探り、その事業経営の基本姿勢について、なお考察する必要があったため、一部重複するところもあるが、新たに論文としてまとめた。
- 2) 高崎宗司『津田仙評伝』草風館、2008年、23-25頁。
- 3) 津田仙「洋学の傳來(下)」『英文新誌』英文新誌社、第1巻4号、1903年、85頁。
- 4) 新渡戸稲造「内観外望」『新渡戸稲造全集第6巻』教文館、1987年、354頁。
- 5) 津田の英語力に関しては、尺振八、福沢諭吉と共に小野友五郎の使節団に加わって米国に派遣された時に以下のような事実が伝えられている。「彼(福沢諭吉)の英語力は、今日のいわゆる観光英語の程度で、とうてい公務の遂行には役に立たないことがわかった。彼の仕事は翻訳方つまり書記官の役だったが、日米往復文書の翻訳をやらせてみると、英文和訳はまだしも、和文英訳の方はてんで駄目で、彼の訳文はとても公用文として使えるものではなかった。そこで自然、書記官の仕事は通訳の津田仙弥に行き、通訳の仕事は最も会話能力のすぐれていた尺振八の専任になってしまった」(藤井哲博『咸臨丸航海長小野友五郎の生涯』中央公論、1985年、117頁)。なお、津田の名前は、幼名「千弥」から「仙弥」、「仙」と改められた。
- 6) 『農業雑誌』504号、505号、510号、511号。
- 7) 内村鑑三「武士道と基督教」『内村鑑三全集』第22巻、岩波書店、161頁。
- 8) 青山なを「明治女学校の研究」『青山なを著作集第2巻』慶応通信、1970、443頁。
- 9) 小野使節団は、小野の従者二名を除くと総勢8名(小野友五郎、松本寿太夫、福澤諭吉、津田仙弥、尺振八、小笠原腎臓、岩田平作、神野信之丞)となるが、その全員を撮影した写真では、小野以外は断髪している。小野は羽織袴姿で帯刀もしているが、頭髪の形は、写真が不鮮明ではっきりしない(藤井哲博、前掲書、103頁)。
- 10) 「津田仙先生略歴」『農業雑誌1020号』1908年、209頁。
- 11) 津田の出身地佐倉には、それぞれ身分の異なる江戸時代の武家屋敷三棟(旧河原家・300石、旧但馬家・100石、旧武居家・90石)が、当時の姿を復元した形で保存されている。敷地や家の広さはもちろんのこと、門構えから玄関の構造まで、俸禄の多寡によって厳格に基準が定められていたことが分かる。そればかりでなく、家長が住む居室は、畳敷きで天井板が張られているが、妻や子どもの生活する部屋は、屋根裏がむき出しのまま、板敷きとなっている。封建的身分秩序を支えた儒教的な五倫五常の教えが、このような形で日常生活の細部まで、深く織り込まれていたことを、よく理解することができる。
- 12) 藤井哲博、前掲書、102頁。
- 13) 同上書、105-107頁。

- 14) 同上書、116-117頁。
- 15) 平山洋「福澤諭吉は公金一万五千ドルを横領したか？」『静岡県立大学国際関係学部紀要 国際関係・比較文化研究紀要』第8巻、第2号、2010年3月、202頁。
- 16) 高崎宗司、前掲書、31頁。
- 17) ちなみに小野友五郎は、明治3（1870）年になって海軍から招かれたがそれを断り、民部省へ出仕し、鉄道測量事業に貢献した（藤井哲博、前掲書、139-154）。
- 18) これ以下の考察は、津田自身の文書に基づく資料的な根拠はないので、状況証拠に基づき、帰納的に推察した範囲を超えるものではない。
- 19) 南北戦争後のアメリカの政治状況は、リンカーンの突然の死とアンドリュー・ジョンソン大統領の就任ということで、混乱を生じていた。リンカーンは、戦争終結後の南部と北部の融和という重大な課題、その理想と現実の狭間のなかで、力と抑圧によるのではなく愛と寛容をもってぎりぎりの融和策を提示していた。それを極めて表面的に浅慮をもって継承し、自分の政治的利益に資するために利用したジョンソンのより南部に有利な政策の遂行は、共和党が多数を占めた議会との深刻な対立を招かざるを得なかったからである。彼は、修正第14条が議会を通過することを妨害し続け、政敵であった陸軍長官エドウィン・M・スタントンを罷免したことで、在職保合法等の違反により上院で弾劾裁判にかけられた最初の大統領となった。
- 20) この部分是小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師』東京大学出版会、1985年、11-57頁によっている。
- 21) 当時、アメリカを訪れた津田を始めとする多くの有能な日本人は、アメリカ女性の堂々たる活躍ぶりに目を見張らされると共に、圧倒的な感化を受けることになった。その典型例が、札幌農学校設立に力となり、明治政府による女子留学生派遣計画の仕掛け人となった黒田清隆であった。彼は、北海道開拓使次官として1871（明治4）年、30歳の時に欧米の開拓事業を視察しているが、日本の文明を進めるため国際結婚の必要性まで感じ、友人森有礼にアメリカ婦人と結婚することをしきりに勧めたというエピソードまで残している（The Japanese in America 大久保利謙編『森有礼全集第3巻』宣文堂書店、1972年、70頁）。時に黒田は30歳、森は24歳であった。まさに血気盛んな若者の若気の至りとも言える発言である。
- 22) 高崎宗司、前掲書、121頁。
- 23) 津田は、この後梅子を米国留学に送り出し、梅子の米国における養育者となり、娘同様に慈しんだチャールズ・ランマン、アデリン・ランマン夫妻や来日したドーラ・E・スクーンメーカーを始めとする女性宣教師たちとの交流を持つことを通して、女子教育の重要性に開眼させられていった。だからこそ、津田は、梅子が独身を貫くことにも、英

学塾を創立することにも反対することはなかったのである。

- 24) 津田仙「農業雑誌編輯大意」『農業雑誌』1号、学農社、1976年。
- 25) 「津田先生の略歴」『農業雑誌1020号』、1908年5月5日、209頁。
- 26) 傳田功『近代日本経済思想の研究』1962年、未来社、163頁。
- 27) 新渡戸稲造『武士道』佐藤全弘訳、教文館、2000年、147頁。
- 28) 高崎宗司『津田仙評伝』草風館、2008年、20頁。
- 29) 「津田先生の略歴」『農業雑誌第1020号』1908年5月5日、209頁。
- 30) 黒住武市『日本通信販売発達史—明治、大正期の知恵に学ぶ』同友館、1993年、25頁。
- 31) 福澤徹三「農業雑誌の受容と実践」『一橋論叢』134 (4)、2005年、748頁。
- 32) 同上論文、746頁。
- 33) 同上論文、749頁。
- 34) 「第11章 通信員則 第一款 通信員タラント欲ル者ハ一般ノ入社式ヲ履行シ、金二円ヲ差出シ置クベシ最モ保証人_二月謝等ヲ要セス 第二款 住所ノ遠近ヲ論セス本社ニ来リ或ハ書翰ヲ以テ農事ノ質問ヲ乞フ者ハ総テ之ヲ通信員トス」(『学農社学校規則』学農社、1879 (明治12) 年、19頁。
- 35) 山鹿旗之進「亡き人の面影」『護教第877号』1908 (明治41) 年5月16日、7頁。
- 36) ジョン・ウェスレー「金銭の使い方」『ジョン・ウェスレー説教53 (下)』勝間田充夫、河村従彦、藤本満訳、インマヌエル綜合伝道団教学局、1997年、415～434頁。
- 37) 高崎宗司、前掲書、133頁。
- 38) 東京都立教育研究所編『東京都教育史 通史編1』、1994年、340頁。
- 39) 高崎宗司、前掲書、58頁。
- 40) 内田糺「第二章 津田仙と学農社」細谷俊夫編著『人物を中心とした産業教育史』帝国地方行政学会、1965年、52～53頁。
- 41) この場合の「月俸」とは、在籍生徒の食費などを意味する (『学農社学校規則』第14章・月謝月俸規・第四款、22頁)。
- 42) 高崎宗司、前掲書、169頁。
- 43) 本多庸一「無窮の向上」『農業雑誌1020号』、1908年5月5日号、214頁。
- 44) 三好信浩「学農社農学校の教育」『広島大学教育学部紀要第一部 (29)』1980年、30頁。
- 45) 隅谷三喜男『近代日本の形成とキリスト教』1961年、新教出版社、18頁。
- 46) 津田梅子が女子英学塾を創設した時の支援者であり、1902年からは英学塾の教授、経営者として梅子を助けたアナ・C・ハーツホーンが、1893 (明治26) 年に、父と共に初めて来日し、津田の家を訪ね、妻初子と会った最初の時の印象を次のように記している。
「津田夫人は、何といえよいか、一つの驚きであった。正真正銘の本当の日本女性と

いうのはこのような女性のことなのだという一つの体现であるように思われた。彼女が存在していることは明白であり、おそらく強い意見と決意を持った女性なのであろうが、それらは全部彼女の内部に閉じ込められていて、外目には彼女は単なる木造のように見えた。もし彼女が感情を持ち合わせていたとしても、使わないために萎えてしまい締め付けられてしまったと人には感じられよう。一方、親愛なる津田氏は、家族全員に対して闊達過ぎるくらいだった。私は夫人が抑圧されている、いわんや、押しつぶされている、あるいは不幸だ、とは思わないけれども。彼女は、ちょうど、霊的なレインコートを着ているようであった。彼女は自分がどのような者で、何をしなければいけないかをよく知っていて、彼女は私に家族のそれぞれをよくわからせてくれた。私は彼女が三田三丁目のメソジスト教会の熱心なキリスト教信奉者だと聞いたが、多分それほど積極的ではないと思う。そして私はその時、そのあとでも、見たのだった。梅子の特質のある部分は母初子から受け継いだものであるということ」（亀田帛子『津田梅子とアナ・C・ハーツホン』双文社出版、2005年、136-137頁。）

アナの人を見抜く眼差しの深さに、たじろぎを覚えさせられるほど鋭い洞察に満ちた人物評である。しかし、この証言を通して、私たちが、はっきりと認識しておかなければならないことがある。まことに逆説的なことではあるが、津田が自由に大胆に「基督にある大平民」として、困り果てた人々、助けを必要とする人々に手を差し伸べる歩み続ける背後で、一切の不平を言わず、ひたすら忍耐して夫に従い、内助の功を尽くした基督にある「正真正銘の本当の日本女性」初子の存在があったということ。